
異世界？いいえ、ジブリ派です。

刺身ハンター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界？いいえ、ジブリ派です。

【NZコード】

NZ8790Y

【作者名】

刺身ハンター

【あらすじ】

ある日、隕石があちてきました。

隕石で逝け（前書き）

異世界・勇者・魔王・転生・チートなどは一切出現しません。

..... キイイイイイイイインドッカーン！――

人類にとつて、歴史的瞬間が訪れた。突如、フィバルディア王国に落下した謎の物体。どうやら、フィバルディア王国一巨大な山、アルファン山に墜落したようだ。急遽、フィバルディア王国は、調査のために、王立軍隊・カガナの調査団をアルファン山に派遣した。どうやら、謎の物体はアルファン山の、深い崖の谷間に墜落したようだった。調査団の一団は、その物体を発見した時、誰しもが驚きの声をあげた。

その物体は、巨大な鉄？石？綺麗な球体に、表面が鏡面のように光り輝き、大きさが直径三十メートルはあろう巨大さを誇っていた。

「……これは、何だ？説明できる奴は、いるか？」

誰も、首を縦に振る人間はいなかつた。調査団の一人が、剣で謎の物体をつつついてみると、あつさりと剣が突き刺さる。どうやら、思つた以上に柔らかいようだ…。

「……………とりあえず、一部を切り取つて、王都に持ち帰りましょう。

L

調査団が、王都に謎の物体を持ち帰り、國中の研究者が徹底的に謎の物体を調べあげた。結果、わかつた事が一つだけ判明した。この物体は、この世界のどこにも存在しない物質で出来ている。謎の物体は、「メテオ・ライトストーン」と名付けられた。

少年は爆発だ！

——メテオ・ライトストーン落下から15年後。

「いいな？絶対に出力を20以上あげるなよーボーイングが限界を超えると、何が起こるかわからないからな！」

「ふうん…、20まで上限を上げたのか？この前は、15じゃなかつたつけ？」

ボーイング。メテオ・ライトストーンを動力とする、民間用小型飛行機。形状は、まるでサーフボードの左右に、翼をくつつけたような形だ。ボードの先端に、直角に取り付けられた操作ハンドルで操作し、足元に四つのペダルがある。メテオライトストーンの出力設定ペダルに、翼の上下可変ペダル。滞空ホバリングペダルに、緊急脱出用ペダルの四つだ。

ボーイングに颯爽と飛び乗る少年。出力ペダルを1／3程度踏み込み、緩やかにボーイングを浮上させ、ペダルを踏み替え、ホバリングに移行させながら、地上で見守る少年に威勢よく言い放つ。

「これだけ改造すれば、ギガルツなんかには負けねえよーこのボーイング、2500KJもパワーがあるんだろ？」

1KJあたり、約10馬力。

KJ＝キルジュ

15年前に落下した、メテオ・ライトストーン。研究に研究を重ねた結果、メテオ・ライトストーンには、未知なる高エネルギーが宿つている事が判明した。その力は、様々な物に効果を發揮する。物

体を浮上させたり、乗り物の燃料として使用すれば、爆発的なパワーを発揮せたりと、まさに未知なる力と可能性を秘めていた。その力を利用して開発されたのが、小型飛行機ボーリング。ボーリングは、ハンドルにしがみつきながら、風を読んで、体重移動をしながらペダルで操る乗り物だ。

「さあ？ 向こうは新型のボーリングに、細部までキッチリ仕上げてあるレーシング仕様のボーリングだからな…。普通に考えたら、まことに勝てん。」

「普通は、だろ？ 大丈夫！ お前が仕上げたこのボーリングも、普通じゃないよ。」

「まあ、頑張つてこいよ。ギガルツなんか、ぶつちぎつて来い！」

「おつ！ 任せとけ。」

ボーリングにしがみついている少年は、右腕をあげて、やる気を一杯表現する。メテオ・ライトストーンは、増える。いや、正確には復元される。切り取つたり、もぎ取つたりしても、5分後には綺麗さっぱり元通りになつてているのだ。その為、一部の科学者の見解では、メテオ・ライトストーンは生きてゐるのでは？ 生物なのでは？ と、いう考えも多數あつた。

ギュイイイイイイイイー！

少年は、おもいっきり出力ペダルを踏み込む。メテオ・ライトストーン廃出噴射機構から、大量の屑と化したメテオ・ライトストーンが、勢いよく廃出される。

「馬鹿、出力を下げるー。」

「おつとつと、つじうつかり 」

「頼むよハルシュ…。いくら旧型といつても、120000ガルは、改造費用がかかるてるんだからなー。」

ガル。この世界で使用されている、金の単位である。

1ガル=1円

ハルシュと呼ばれた少年は、ボーリングに乗っている少年の名前だろ。だいたい15歳くらいに見え、短く切つて整えた髪の毛に、少しキツめな目つき。身体は細めで、まだ筋肉（体）が完全に出来上がっていない。そのため、外見は少々瘦せて見える。15歳という歳を考えれば、当たり前かもしけない。

「へへッ、すげえパワーだな！120000ガルなら、ツケとけよ。レースの賞金で返すからさつー！」

ギュイインーギュイイーンー！

「だーかーらー、そんなにフカすなよつー！」

ハルシュと会話している少年は、自分が天塩にかけて作り上げたボーリングを心配そうに見つめながら、手に持っていたスパナを工具箱の中にしまづ。

「ジョンは心配性なんだよ。そんなフカしたくらいで、壊れる代物じゃねーだろコイツは…。」

ハルシュとジエン。二人は、幼なじみで何をする時も一緒にいるんで、まるで兄弟のような親しい仲だ。ジエンの家は、ボーリングの小さな整備工場を営んでおり、工場の一角が仲間内のたまり場となっていた。

「まあ、今日は帰るわ。また明日な！」

「おひ、おたな。」

(.....1.....2.....3!-!)

ドカンッ！！

おもいつきり出力ペダルを踏み抜くと、信じられないような加速で上空に吹っ飛んで行くボーリング。あまりの速度に、風がハルシューと正面からぶつかり合い、目も開けられない。

（うわっ、凄いパワーだ！しがみついているのがやっとで、操作なんか無理！）

出力ペダルを緩め、滞空ペダルをおもいつきり踏むハルシュ。ビタリ！と、空中でボーリングが急停止する。

(……高度、150ちょっとかな？一瞬でここまで上昇するパワー……、凄いを通り越して、恐ろしいな。)

フィバルティア王国で、一番大きいアルファン山が、ハルシュの目に
前にそびえ立つように見える。

(……メテオ・ライトか。あの山に、墜ちてきたんだよな。)

まるで、直ぐ近くに聳えているような錯覚にさえ、陥るような巨大さを誇るアルファン山。中腹の辺りに、ぽつこりと、まるで風景にそぐわない物体が、めり込んでいる。言わずと知れた、メテオ・ライトストーンである。

(メテオ・ライトの不思議パワーはすげえからな……。そのうち、アルファン山をじっと持ち上げたりして。)

「ゴウンゴウンゴウンゴウンゴウン……！」

異様な音と共に、ハルシュの遙か上を、異質な何かが横切っていく。

「うつわ……、フィバルディア王国最大級の大空戦艦・ランカーダルツだあ！」

ランカーダルツ。フィバルディア王国最大級の、超弩級・空中要塞戦艦。メテオ・ライトストーンの力を応用して作られた、超巨大砲・星屑砲が30門搭載されているフィバルディア王国の最大戦力。全長1000メートル。

「マジすっげ～。」

まさに、圧巻の一言。赤と青の綺麗なカラーリングが施されており、完成当初は、あまりの大きさに、人々は恐怖感を抱いた。

「ヒュー！俺もいつか、あんな戦艦に乗つてみたいねえ……。さて、帰ろうかな。」

ボーリングの滞空ペダルから足を離し、出力ペダルを僅かに踏むと、ゆっくりとボーリングが風を切りながら進んで行く。

キユイイイイイ
.....

メテオ・ライトストーンを原動力とする乗り物は、例えようのない、
独特な音を奏でる。眼下に広がる風景を眺めながら、ハルシュは帰
路につく。

ばぶぶぶぶぶぶ

「げ!? メテオ種の暴れ牛じゃん。追い払うか、振り切るか?」

メテオ種。メテオ・ライトストーンを誤飲し、体に異常をきたして独自進化した、この世界独特の生き物。

「追い払うような道具も無いし、振り切るか！」

ハルシユに急接近する生物。そいつは、茶褐色の皮膚に、三十センチ程の角が額に生えている、体格の良い牛だ。背中に、四つの細長い透明な翼が生え、翼というよりは、まるでトンボのような羽が正しいだろう。どうやら、ここら一帯は、このメテオ種のなわばりらしい。凄まじい勢いで羽を動かし、ハルシユに接近する暴れ牛。

「よひしゃーーー！テメエなんか、ぶつかせりでやるーーー！」

少女は残酷だ！

ぎらりとした角が、まるで鋭利な刃物のように見える。あんな角で刺されたら、一たまりもないだろう。ハルシユは、ボーリングの出力ペダルを踏み込み、重心をおもいつきり左側に傾ける。

「ウオリヤアアアアア！」

左におおきく体を傾け、曲線を描きながら、ボーアイニングは風を切る。ちらつと後ろを振り返ると、メテオ種は田を充血させながら、恐ろしい形相で羽を動かしながら、ハルシュを追い掛けてくる。舌打ちをして、ハルシュは出力ペダルをさらに踏み込む。

ガギュイイイイイイイイー！！

大量の白煙とともに、廃出噴射機構から、屑と化したメテオ・ライストーンが排出され、さらにボーリングは速度を上げる。

「ハツハツハアツ！ すげえよこのボーリング。どこまで加速するだよ！？ これなら、メテオ種でも……」

「アーヴィングの死」

――王都・ムルカーン

「キヤハハハハ！マジウケるんですけど。」

— ねえ、— い、ツツイしない? —

サンゼー！なんとかムカーくじい

路地裏で、数人の少女が寄つてたかつて、一人の少女をボコボコに殴る・蹴るの暴行を加えている。殴られている少女は、抵抗もせず、黙つてただただ背中を丸めこみ、事が終わるのをじつと耐えている。 ようにも見える。

۱۰۰

「うわ、マジキモー！」

「あんたなんか死んじゃえば? どうせ親もいないんだしさ。」

「……ん？あのボーリング、めっちゃ低く飛んでない？」
「ホントだ。しかも、メテオ種に追いかけられてるしい。」

「うつわ……王都まで来ちゃったよ。このまま、適当な路地に隠れてやり過ごじゃう……。」

ハルシュは、ボーアイントの速度を落とし、自分の真後ろにメテオ種をギリギリまで引き付ける。

「……これでもくらえつ……」

今まさに、メテオ種の角が、ハルシュを捉えようとした瞬間、ハルシュはボーアイントの出力ペダルを全力で踏み込む。すると、莫大な量の白煙とメテオ・ライトストーンが飛散し、メテオ種にとつては、めぐらましとなる。ハルシュの白煙攻撃によって、メテオ種は左右に首を振り、苦しそうに怯む。その隙に、ボーアイントをおもいつきり地面に傾け、地上に向かつて急降下するハルシュ。

「……ねえ、あのボーアイント、なんかこいつに来るよ。」

「ちよつ、ちよつと！ 突っ込んで来るつて！」

「シャレになんないしい～！」

無理矢理路地裏に、ボーアイントを強引に着陸させようと試みるハル

シユ。少女達は、そんなハルシユの姿を見て、我先にと、一目散に逃げ出して行く。地面と僅かな距離で、ハルシユは滞空ペダルを踏み抜き、見事着地に成功する。メテオ種は、王都の上空をぐるぐると旋回したあと、悔しそうに踵を返して去ってこぐ。

「……ふーー、ようやく逃げ切れたぜ。」

心底疲れた様子で、ゆつたりとボーイングから降りるハルシユ。すると、路地の片隅に、背中を丸めて何かに怯えているような様子の、少女がいる事に気付いた。歳は、自分と同じ15、6歳くらいに見える。

「ん？ おい、そこで何してるんだ？ 気分が悪いのか？」

「…………え？」

その少女は、薄い紫色のセミロングの髪形に、吸い込まれそうなくらいに大きく、綺麗な瞳。整った輪郭に、すらりとした鼻筋。美少女までとはいかないが、かわいらしい雰囲気の女の子と言つた感じだ。ハルシユは、少女の顔や体が、痣だらけなのに気付き、一体どうしたのだろう？ と、思い、少女に聞いてみる事にした。

「……その傷、どうしたんだい？ 殴られたような跡があるじゃないか。」

すると、少女は驚いたような表情を浮かべた後に、俯きながら、ポソリと小さな声で、ハルシユの質問に答える。

「……一つもの事だよ。」

「いつも？なんだそれ？お前はいつも殴られてるのか？つーか、殴られるような事をしたのかよ？」

「……わからない。殴られるような事は、していないつもり。けど、周りの人達は私の事を蔑んで、殴つたり、蹴つたりしてくるの。」

「いじめられてんのか…。」

「……そうかもね。私には、もう何も残つてないから、いじめられるにはうつてつけの人間なのかも。」

「やり返せよ！悔しくないのか？いつも理不尽な事で殴られて、なんともないのかよ？感じないのかよ？」

「……やり返したら、あの人達と同じになつてしまつ。だから、私は耐える。傍からみれば、私は一方的にやられているだけかもしれないけど、心……気持ちでは勝つているわ。」

何故か、ハルシユはいらついて仕方がなかつた。理由はわからないが、自分の中の考え方が、酷くいびつに歪み、ムカついて喚きたい衝動にかられた。

「馬鹿じゃねーの？そんなの、ただ逃げるだけじゃないか。加害者と同じ？そう言つて、自分の弱い心から目を背けて、現実から逃げてのを正当化してるだけだろ？やり返す勇気も、力もないからツー！」

そこまで言つて、気が付いた。何故、今日初めて会つた少女に、こんな事を叫んでいるのか、理解できなかつた。ハツと我に返り、少女を見つめると、かなり悲しそうな顔で、ハルシユをじつと見つめ

ていた。

(ヤツベー、泣きやうじやん。何か、何か言わないと。)

「……じゃあ、私はどうすればいい訳?貴方に何がわかるの?」

「……えーっと、……変わるんだ。」

「え?」

「行動するんだよ。まず、周りを変えるなら、自分が行動しないと。黙つて、じっと耐えていたつて、状況は変わらない。自分から動かなきゃ、今の状況は絶対に変わりやしねえ。」

セイまで言つて、自分はとんでもなく恥ずかしい台詞を平氣でペラペラと喋つて、急に恥ずかしさが込み上げてきた。

「……あつ、えへっと、その……。」

「……。」

「……。」

なんとも言えない、氣まずい空気がただよい、ハルシユがどうか悩んでいると、少女が口を開く。

「……私、急いでるから。」

言つて、少女は足早にハルシユの目の前から去つていいく。ハルシユは、少女の姿を、いつまでも眺めていた。

(
.....変な奴。
)

男は意地を張る

——翌日、ナルファンデス学園・原動科学教室

「それで、数百キロ離れた王都まで行つてきたのか？」

「しょうがねえだろ？あのボーアイントは、戦闘用の装備を取つ払つて、極限まで軽量化された、違法改造ギリギリのボーアイントなんだから…。」

ナルファンデス学園。ハルシュとジエンが通う、全校生徒3800人の、大規模な学校である。普通・生物・原動の三つのクラスに別れていて、ハルシュとジエンは、原動のクラスに属している。ハルシュは、机の上に足をのつけながら、男のボーアイント特集！と書かれた雑誌を顔面に乗せ、けだるそうに、ジエンと昨日の出来事を話していた。

「だいたいよー、なんで対メテオ種用の装備を取つ払つたんだよ？昨日みたいに追い掛け回されたら、不便で仕方ねーよつ！」

「あのなー、レースになつたら、そんなモン邪魔だろ？いたずらにボーアイントのバランスを崩す、余計な物としか俺には感じないからな。だから取つ払つた！」

レースとは、年に一回だけ行われる、ナルファンデス学園伝統の行事だ。いわゆる、文化祭の一大イベント。普通・生物クラスは、出店や劇を行い、楽しむのだが、原動クラスだけは別。二人一組になり、授業で教えられた知識をもとに、ボーアイントを研究・改造して、個々が仕上げた最高のボーアイントでレースに臨む。レースで上位入賞した者には、名誉の称号・ボルガシアの称号が与えられ、後の進

路に大きく影響してくるのだ。だから、皆が血眼になりながら、レースまでにボーアイントを必死に改造する。もちろん、ハルシユとジエンもその中の一人だった。

「だいたい、そんなに対メテオ種用の装備が欲しかつたら、コンパクトBCでも背負つてボーアイントに乗ればいいんだ。」

コンパクトBC。子供が背負える位の大きさで、民間人が所有を許可された武器。対メテオ種用の武器として用いられる事が多い。

「それこそ邪魔だ！ あんなモン背負つて、ボーアイントなんか操縦できねえよ。」

「じゃあ我慢しな。もうレースまで、日にちが近い。他の奴らは最後の仕上げに入つていて、今更そんな事話しても無駄だぜ。今日の放課後に、最終調整に入ろう。」

「ギガルツの野郎は？ あいつには、死んでも負けたくないんですけど。」

ギガルツ。ハルシユとは犬猿の仲の、ライバル的存在。ナルファンデス学園では、剛力のギガルツか、狂犬・ハルシユと呼ばれる程に有名人だ。何をするにも、ハルシユとギガルツは、互いに負けまいと今まで争い合ってきた。例え、勉強でもスポーツでも喧嘩でもなんでも…。今回のレースも、例外ではない。

「ギガルツのボーアイントは、もう仕上がつてるらしい…。あいつらのボーアイントは、新型をさらに改造して、エンジンから翼まで、ほとんどの部品がレーシング仕様に変更されてるみたいだな。」

「まつ、なんとか勝てるだろ！俺の神がかり的な操縦テクニックで、ギガルツなんかぶつちぎりぞ。」

「メテオ種も振り切れないのに、新型のボーリングをぶつちぎるなんて無理だろ…。」

「なにーつ、言つたなジエン！覚悟は出来てんだろ？な？」

「アハハツ、冗談だつて…そんなに怒るなよ。それより…」

声を小さくして、小声で喋り出すジエン。ハルシュは耳を近付け、ジエンの言葉に耳を傾ける。

「……尊なんだけど、今度のレースにな、王立軍隊・カガナのお偉方が来るらしいぜ。」

「へえ…、なんで？」

王立軍隊・カガナ。フィバルディア王国の治安を維持する軍隊。主に他国の侵略を防いだり、時には進行する組織の事である。また、メテオ・ライトストーンの他国への流出や、闇商人の横流しに二ラミを利かせる。敵国との戦闘時には、ランカーダルツや、戦闘用ボーリングで闘う。

「優秀なボーリングの整備士と、乗り手が欲しいんだって。」

「な～るほどね。ぶつちやけた話、カガナがスカウトに来るつてか？兵士も人手不足なんかね～…。」

「かもな。」

——王都・マルカーン

「逃げるだけだろ。やり返す勇氣も、力もないからっ！」

昨日ハルシユに言われた言葉が、雷鳴のように鳴り響き、頭から片時も離れない。

(……なんで、あの人の言葉が、……頭から、離れないの？)

何かに導かれるように、フラフラと王都をさ迷い歩く少女。目は虚ろで、明らかに雰囲気がおかしい。

(……本当は、わかつてゐる。自分で、……氣付かないようにして、いた、……知りたくなかつた部分を、……ごまかして、隠していた。それを、……あの人があ、開いたんだ。)

「おつ？ いたいた

「今日も遊ぼうかあ。」

「いっち来いよ。」

突然、後ろから髪を掴まれ、三人組の少女達に、路地裏へ連行される。別に、今に始まつた事じやない。半年前から繰り返し行われて

いるリンチに、次第に馴れていった少女。少女の名前はミレナ。一年前に事故で両親と住む家を失い、親戚もいない為、一人で細々と王都の路地裏にひっそりと暮らしている。そんなミレナに田を付けたのが、彼女達だ。親も住む場所もない、こじき同然のミレナに、自分達のストレスを解消する為ほぼ毎日ミレナを見つけては、殴る蹴るの暴行を加える。暴力で済むなら、まだマシな方だ。知らない中年の男から金を貰い、ミレナを男に売った時もあった。まさに、人間として最低な部類に属す三人組。

（……自分が変わらないと。）

「……いや。」

「は？なんか言つたかクズッ！」

「離して！」

「なんだとこの野郎～！」

「フルボッコ決定～」

「マジ死ねよ。」

少女の放った拳が、ミレナの頬にめり込み、あまりの痛さに頬を押さえながら、倒れ込んでしまうミレナ。すかさず、ミレナの腹部をおもいつきり踏み抜き、三人でひたすらミレナの体を蹴り飛ばす。だが、ミレナの視線は、まるで死んではない。今までとは違う、逃げの弱気な姿勢ではなく、鋭く相手を睨みつけるような、強い視線で三人組を見ている。

「……コイツ、マジムカつくしい。」

「殺す？」

「…いや、いい事思いついた。」

そう言って、三人組に引きずられるように連れていかれるミレナ。四人の視線の先には、アルファン山がうつっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8790y/>

異世界？いいえ、ジブリ派です。

2011年11月30日12時58分発行